

翻訳文化研究会の歩みを振り返って

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 今野, 喜和人 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027401

翻訳文化研究会の歩みを振り返って

今 野 喜 和 人

2020年3月をもって静岡大学を定年退職する筆者に対して、本号の編集担当者から翻訳文化研究会の歴史についての執筆依頼があった。当初はお断りしたのだが、同会の活動が15年目を迎え、本誌も今号で第15号（他にも別冊2号あり）となるので、ここら辺りで来し方を振り返るのも悪くはないと思い直し、駄文を弄することとした。

研究会のそもそもの発端は、1995年から足かけ15年にわたり静岡県によって開催された「しずおか世界翻訳コンクール」に、人文学部（当時）言語文化学科所属の教員が運営や審査で協力したことにあつた。同コンクールは日本近代文学を各国語に翻訳する技量を競うもので、2年に1回、英語部門にフランス語・中国語・ドイツ語・韓国語・ロシア語のうちから各回一つ（もしくは二つ）の言語部門を加えて行われ、数ページの短編小説と評論の二編が課題となった。ドナルド・キーン氏を審査委員長に迎え、賞金や副賞も魅力的で、地方自治体が行う文化事業としては異例の意欲的・挑戦的なものだった。このコンクールを足がかりにしてプロの日本文学翻訳者が何人か生まれ、日本文化の海外発信や国際理解にも大きな貢献をしたが、残念ながら予算不足で第7回をもって終了してしまった。

それまでの言語文化学科はよく言えば独立した研究者の集まりであり、なかなか共同研究を行おうという風潮はなかったように思われる。しかし異なる言語文化を専門にし、異なる学会に所属する研究者を束ねるテーマとして広義の「翻訳」はうってつけだった。国立大学の独立行政法人化以降、地域貢献を求める圧力が強くなっていたのに加え、文学に理解のある高校教員の方々が県庁に出向していたことも追い風となって、翻訳コンクール絡みの仕事に携わる機会も多くなった。こうした雰囲気の中、2005年に当初田村充正教授のリーダーシップによって本研究会は発足したのである。その後、代表は私今野が引き継ぐことになる。

上記コンクールの第3回(2001年)ドイツ語部門で「優秀賞」を獲得し、後に数多くの日本現代文学を独訳することになるトーマス・エゲンベルグ氏(当時静岡大学外国人教員)が本研究会のメンバーとなったこと、毎回の最優秀者に副賞として与えられる1年間の静岡留学の行き先として、本学大学院を選ぶ受賞者がコンスタントに現れたことも、大きな刺激となった。かくいう私も、2007年の第6回フランス語部門に審査等で協力した縁で、最優秀賞を受賞したマリー・フーシェ氏の指導教員を引き受けた。数ヶ月にわたって中勘助の『銀の匙』と一緒に読み、仏語への翻訳を目指したのも良い思い出になっている。フーシェ氏の翻訳文化研究会例会での発表は日本近代文学専門の同僚をも驚かせる高度なものだった。残念ながら『銀の匙』に数多登場する古き日本の品々(翻訳論で言う「レリア」)に阻まれて翻訳は難航し、さらに同氏のフランス帰国に際して、翻訳のために作った膨大なメモが紛失するという不幸な出来事もあって、翻訳出版に至らなかったのは今でも悔やまれる。

それまで制約の多い個人研究費のみで研究を続けていた教員たちであったが、学部にも競争的経費が導入されたことで翻訳文化研究会の機関誌出版費用を獲得でき、タイトルは『翻訳の文化／文化の翻訳』として発刊した。当初はとりあえず1号限りの研究発表の場と考えていたので、「第1号」という記載も表紙に無い。その後コンスタントに研究費が獲得できるようになって、年刊誌となった。メンバーの研究発表も定期的に行われ、折々にゲストの講演会も企画したが、「先立つもの」を得るために科学研究費に応募することになった。その頃から全国の大学の研究予算は減少し、科学研究費に応募するよう求める圧力は強く、競争も激しくなっていたが、個人での採択はなかなか難しくとも、十名単位で集まれば、過去の業績数で優位に立てる。あとは「翻訳」というしっかりした共同テーマを洗練させれば良かったので、幸いにも2回目の応募で採択された。科研費というのは金持ち優遇システムで(これは改善の余地が大にあると思うが)、ひとたび採択されると次の採択のハードルが極端に下がる。一回目は基盤研究のCの枠であり、その後再びC、次いでB、Bとこれまでに都合4回の採択を受けている。

資金が潤沢になったおかげで、ゲストの対象者が広がった。特筆すべきは、言語と言語の狭間で活躍されている創作者を数多くお招きできたことであろう。本誌の活動記録にも記されているが、楊逸、リービ英雄、吉本ばなな、多和田葉子、町田康、中村文則、吉増剛造と、錚々たるお名前が並ぶ。上に触れたトーマス・エゲンベルグ准教授(当時)が中村文則氏の『掏摸』をドイツ語に訳し

た機会に、中村氏と東京大学（当時）の野崎歓氏を迎えて行ったシンポジウム（2014年）は、遠方からの参加者も含めて広い会場が満員になるほどの盛況で、大好評だった。他にも他大学から何人もの研究者を招聘でき、こうした方々の希有な講演や対談・朗読・パフォーマンスを市民にも味わって頂くことで、言語文化学科の存在感をアピールできたと思う。

こうした研究の積み重ねによって、昨2019年、『翻訳とアダプテーションの倫理——ジャンルとメディアを越えて』（春風社）を発刊することができた。執筆者は14名、同書「はじめに」を引用すれば、大体の内容は推し量れよう。「[…]以上、言語的には日・中・韓・英・独・仏・西・チェコの八言語、時代的には古代ローマから現代、ジャンルのには小説・詩・映画・戯曲・思想から文化全般にわたる問題について翻訳とアダプテーションが多角的に論じられる。それは同じテーマの変奏である場合も、アプローチ自体が異なる場合もあるが、各章が執筆者同士の対話や議論の一環として読まれることになれば幸いである」

現在は2019年度から2022年度にかけて「言語・メディア・文化を横断するアダプテーションの総合的研究」をテーマに科研費による研究が進行しており、著作権に関する法律の専門家も加え、またこれまで手薄だった演劇に関しては、静岡から世界に向けて発信を続けているSPAC（静岡県舞台芸術センター）との連携を打ち出して、新たな分野も開拓しようとしている。

と、ここまでが翻訳文化研究会についてのある程度オフィシャルな歴史だが、研究会メンバーの多くは私も含め、翻訳の研究だけではなく、狭義・広義の翻訳教育や、翻訳そのものの実践も行っている。これについて最近考えている個人的な感想を最後に記しておきたい。

「翻訳」は現在、人間の言語史における最大の転換点を迎えている。言うまでもなく、機械翻訳の改良と近未来的な完成のことである。すでにヨーロッパ言語同士はもちろん、日本語と他の言語の間でも、おおまかな内容把握には問題ないレベルの機械翻訳が現在では簡単に手に入る。こうした時代において翻訳という営み、翻訳家という職業、あるいは語学教育はどうなって行くのであろうか。もちろん、こと文芸翻訳に限って言えば、現在のところ機械翻訳ではどうも用をなさず、翻訳家が不要になる時代はまだ到来していないが、AI（人工知能）が小説を書く時代である。文芸翻訳についても部分的な使用に役立つようになる時代はそう遠くないかもしれない。

これに関連して思い浮かぶのが「訳読」のことである。日本人の多くは中学

校で英語を学び始めて以来、英語（外国語）のテキストを日本語に直す訳読を語学教育の重要な部分として強いられてきた。私のように外国文学や語学を教える立場となれば、訳読との付き合いは半世紀以上に及ぶ。しかし、近年になって訳読に対する風当たりは強く、悪しき因習的語学教育の象徴としてやり玉に挙げられ、日本人の語学下手の原因にさえされることがある。私自身は因習にどっぷりはまっているのかもしれないが、英語やフランス語など、日本語とまったく異なる文法体系を持った言語を大人になってから学ぶにあたっては、一字一句の意味と役割を解明して進まない限り内容を正しく理解することはできないと思っている。また訳読によって培われた外国語受信能力が、会話や作文といった発信能力の発達を阻害する要因になるとは考えていない。要はそれぞれの語学訓練にどれだけ有効に時間を使えるか、という量と質の問題である。訳読はトータルな語学力の前提とするためにも、またその能力の有無を確かめるためにも、能率的かつ有意義な手段だと思っているので、未だ授業では学生に課し続けている。しかし、こうした授業において、学生たちが機械翻訳に頼ろうとする誘惑をいつまで払いのけられるか、最近は不安になってきて（もうすでに利用している学生もいそうだが）、早晚別の方法を考えざるを得ないのではないかと、とも一方で思っている。

問題はこの「訳読」と「翻訳」の関係である。教室の中で行われる「英文和訳」がそのまま「翻訳」にならないことは、誰でも感覚的には理解しているだろう。「訳読」と「翻訳」の関係は、「機械翻訳」と「文芸翻訳」の関係に似たものがある。しかし、翻訳をテーマにした授業で学生に試しに「翻訳」を（高校時代の和文英訳を求めているのではない、と強調して）させてみると、結果は見事に二つに分かれる。一つは「英（仏）文和訳」から一歩も出ていない完全な直訳体。もう一つは一読した限りではこなれているが、「訳読」の手順を無視して感覚的に読んでいるため、まったく原文の意味から離れてしまった訳文。後者は日本語を書く力は持っている場合も多いので、その点有利な場合もあるが、外国語を精密に読む訓練をしていないためにゼロから語学を学び直さねばならない。一方、前者はテクニックさえ身に付ければ、徐々に読むに堪える訳文を完成できるようになりそうだが、実際はその壁はとてつもなく高い。長年の「訳読」の習慣は習性になって、無意識レベルまで染みついているのである。

私自身、この壁を乗り越えるのに大変な苦勞を強いられた。いや、今でも乗り越えられていないかもしれないのだが、曲がりなりにも何冊かの翻訳を出版

できるようになったのには大学院時代の恩師の力が大きかった。博士課程に入っ
てしばらくして、研究の方向を見失って鬱々としていた頃、その先生が「とり
あえず何か翻訳でもやってみれば」と声を掛けてくださった。おまけに「訳文
を見てあげる」とのことだった。すると確かに机に向かうのが億劫でなくなり、
専門分野に近いテキストを1頁ずつ翻訳して行くことは精神衛生上も大変心地
よかった。その訳文を先生のところに持って行くと、翌週には真っ赤になるほ
ど訂正が入った原稿用紙が戻ってきた。先生の専門分野はドイツで、むろんフ
ランス語も読まれたが、そのテキストの仏語原文は目にしておられなかったと
思う。しかし、指摘はどこまでも的確で、自分の行った「翻訳」もどきは日本
語ではない、「訳読」文体という特殊な言語で綴られていたことを初めて実感し
たのであった。添削のやり取りは、先生がお忙しくなられたこともあって数回
で終わったが、その時の経験は本当に貴重だった。訳読はあくまでもテキスト
の意味内容を把握するための手段、翻訳においてよく用いられる音楽の演奏の
比喩を用いれば、単なる譜読みの段階である。演奏はその段階が終わってから
やっと始まるのであって、訳読から一歩も二歩も出ていない「翻訳」を世に出
すことは、たどたどしい譜読みをそのまま聴衆に聴かせる拷問にも等しい。現
在ならば機械翻訳をそのまま提示した方がよほど潔いだらう。

私が大学院時代の恩師から受けたような指導の経験は、実は多くの翻訳家が
回想している。つまり、そうした訓練は徹底した個人的な指導によってしか身
につかないということである（これも音楽の演奏に似ている）。私が師から受け
た恩恵を今度は学生に向かって返したいとかねがね思ってきたが、自分の怠惰
もあって、その機会がほとんど訪れないまま定年を迎えることになった。それ
だけが心残りである。